

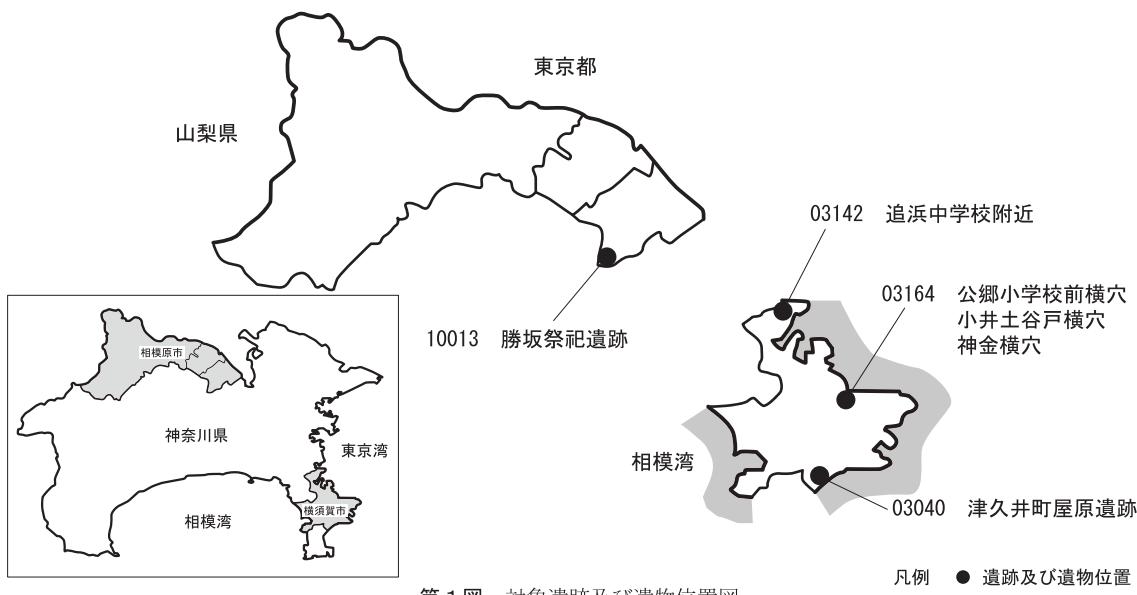
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(13)

—通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介—

古墳時代研究プロジェクトチーム

例　　言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要21号には相模原市域の10013番、横須賀市域の03040・03142・03148・03164番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14~19に掲載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は相模原市10013番：新山保和、横須賀市03040番：柏木善治、03142・03148番：岸本泰緒子、03164番：長澤保崇が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は〔調査（踏査）年月〕〔資料保管場所〕〔記載内容概略〕とし、2. は〔（遺跡及び）遺物（遺構）概要〕〔掲載図書〕〔掲載図書概略〕〔小結〕などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
なお、個人情報に関する記述は一部削除して掲載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれらから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



年報番号 相模原市10013 勝坂祭祀遺跡（3）相模原市磯部字勝坂1904

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月日]

昭和52年7月31日

[資料保管場所]

個人蔵

[記載内容概略]

前号でも、明治村通信の封筒に入っていた資料について紹介したが、本号も引き続き本封筒に入っていた資料について紹介する。

今回詳細する資料は、県史考古資料の神奈川県内主要遺物調査表2通で、県史考古資料Bと書かれている（第2・3図）。2通とも調査者として「赤星直忠」と押印され、資料1には「控①」、資料2には「控②」と記載されている。

第2図には、時代区分に「古墳」、所在地に「相模原市磯部小字勝坂」、分類に「祭祀遺跡」と記載されている。手書きで「出土と調査までのいきさつ」と記載され、概略として「出土地は○○氏宅北側（同氏所有地）50m程の水田、昭和36～37年頃、畑地を約1mほど掘り下げ（土は東側畑地に盛り上げていた）たとき、頭大の河原石を径5m位丸くならべた内側から滑石製模造品多数が出土、付近から土師器（和泉式、鬼高式）が出、又焚火あとがあったという、土器との伴出状態、遺物の集散状態等、深さの差など不詳」などと記載されている。

遺物については、「出土品 銅鏡2（個は数）鉄鏡1、子持曲玉1、剣鏡等石模造品、碧玉製大管玉1等、及び土師器（出土の半数くらい）」と記載されている。

文献として、『神道考古学講座 第2巻 原始神道期一』雄山閣刊（昭和47年）と記載されている。その他に、入手資料として、写真「一部」、測図「一部」と協力者として、「塚田、小暮」と記載されている。

第3図には、資料1と同様に、時代区分に「古墳」、所在地に「相模原市磯部」、地形図名の二万五千分の一に「原町田」、分類に「祭祀遺跡」と記載されている。概略として、「鳩川上流左岸、勝坂磯部所在有鹿神社旧地（湧泉傍になる）の南方約100m、居宅北50mばかり水田中。鳩川の流れる浸食崖の東岸裾に近い部分。昭和36～37年頃、土地所有者が畑を水田にし鳩川の水をひこうとした際当時畑表面より約1m下に頭大の河原石が径5mくらい円形に配された中から滑石製模造品多数が散在的に発見せられたものという、土師器の破片となったものはすべて捨てられたもので、全体の様子は不明である。今和泉式と鬼高式がある。出土遺物は多いが本日見せられたのは半数以下である。」と記載されている。

出土遺物について、青銅鏡2（1は半次）鉄鏡1、滑石製鏡6、剣形12、曲玉形6、白玉3、小白玉48、刀子形1、碧玉製大管玉1、土師器2」と記載されている。入手資料として、写真「〇」、測図「〇」と協力者として、「塚田」と記載されている。また、文献として、『「祭祀遺跡の諸形態」の中「神奈川県勝坂」の次（神道考古学講座 第2巻 原始神道期一）雄山閣刊（昭和47年）』と記載されている。また、「②のみ県史へ提出する」と記載されている。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

本資料は、神奈川県相模原市勝坂祭祀遺跡についての概略である。遺跡の地理的環境、発見の経緯、遺構の概要、遺物の概要について順番に記載されている。第2図と第3図は、ほぼ同様の内容が記載されているが、幾つかの点で相違が見受けられる。まず、第2図のみに記載されている内容として、遺跡の部分に「出土と調査までのいきさつ」と書かれている点が挙げられる。次に、第3図のみ見られる点として、「②のみ県史へ提出する」と地形図名に「原町田」と書かれている点が挙げられる。資料の内容を比較すると、第2図の内容の方が詳細と言える。以上の点から、第3図の内容が県史に提出された神奈川県内主要遺物遺物調査表であり、第2図の内容を精査して第3図を完成されたことが窺える。

次に、資料の加筆修正されている点を見てみると、資料右上にある調査日時の7月31日が二重線で消されており、9月21日と訂正されている。この点は両資料に共通する。第3図を見ると、「9月21日（報告日付）」と記載されており、資料調査が7月31日であり、報告日付が9月21日であったことが想起される。また、協力者の部分を見てみると、第2図では「塚田、小暮」とあるが、第3図では「塚田」1人に変更されているが、理由は不明である。

資料内容を見ると、この調査表の作成段階では、赤星氏は勝坂祭祀遺跡出土遺物の半分しか実見しておらず、土師器の破片はすべて捨てられたことが聞き取りされている。

本資料は、同封されている資料から『神奈川県史 資料編20 考古資料』を作成する時に集めた基礎資料と見られる。今回の資料は、その時の調査資料の一部であり、他の資料も多数あることから、次回以降も継続して資料紹介を進め、内容を精査することとしたい。
(新山)

引用・参考文献

- 大場磐雄 1972『神道考古学講座 原始神道期一』第2巻 雄山閣出版
神奈川県県民部県史編纂室 1979『神奈川県史』資料編20考古資料
相模原市 2010「勝坂有鹿谷祭祀遺跡資料報告書」『相模原市史調査報告書』6

古墳時代研究プロジェクトチーム

県史考古資料B

9月21日

神奈川県内主要遺物遺物調査表

52年7月21日調査

		調査者		赤 岩 直 忠	
時代区分		古墳			
遺 跡	所在地	相模原市緑新岸町			
	地形図名	二万五千分の一		他	
出 土 と 調 査 い で の い す る 跡	分類	祭祀遺跡			
	略	出土物等皆民衆(同氏所有地)5cm程の水田、頭骨3つ、瓦片、火薬玉、西面瓦が散在し水田から水を以てた。烟燭は約1mほど伸びり升(土塔)側に點(塗り付)れていた。セミ大の石柱を立てる所が2ヶ所あり、其の脇に瓦が散在する。又煙燭火口より出る土塔との併せて、遺跡の集散状態等、深さの差など不詳			
遺 物	出土状況	事			
	並び				
文 獻	品目				
	(種類 量)	鏡(金銅鏡2(10枚分)銀鏡1、子持鏡1)、劍 鏡等不詳(5枚)、碧玉大瓦2枚、及心土瓦等 (4枚半左右)			
所蔵者					
入手資料		概報	写真	○印	測図
協力者		野田、小暮			

第2図 懸史考古資料B（控え①）

県史考古資料 B

9月21(木) 10時

神奈川県内主要遺物調査表

52年 9月21日調査

(2) 古墳へ移出する

調査者	赤星直忠
-----	------

時代区分		古墳
所在地	相模原市緑ヶ丘	
地形図名	二万五千分の一 原町田	他
分類	祭祀遺跡	(祭祀)
概略		鶴巣上流左岸開墾地(在原町田)付近 堤防がある)の東方面約20m、 北50mばかり)水田中。鶴巣川の流れ浸食谷 の東岸斜面に亘る部分。昭和36年3月頃、 新規地造成を水源にして原川の水に
遺物	出土状況	とひこうと(長尺祭器等)のほか土器下に は既大の円錐石が複数見つかって円形石籠裏 され去中から「青石」模造等も多數加勢作 的に見せられるがこれらは既に被火などし て、土器等も見えれども、土器等の碎片 と落ちてゐるのはすべて捨てられ去るので全个体の 子供子孫川である。今後出土と零散式がある。 出土遺物は多いが本日はそれ去のは半数以下であつた。
	品目 (種類・数量)	青銅鏡2枚(1枚未だ)、滑石鏡1枚 刀子1枚、珠玉等大粒21粒、小粒2枚 下である。
所蔵者	青銅鏡2枚(1枚未だ)、滑石鏡1枚 刀子1枚、珠玉等大粒21粒、小粒2枚	
文獻		創刊12号、改訂版6号、改正3号、小豆1号、68 刀子1枚、珠玉等大粒21粒、小粒2枚
入手資料		概報 写真 () 調査図 () 他
協力者	鶴巣川	

文獻
 鶴巣川の沿岸部の古墳群の中でも特に其の特徴的な
 (神奈川古墳群)を主な題材とした書籍等
 (1982年9月26日)

第3図 県史考古資料B (控え②)

年報番号 横須賀市03040 横須賀市津久井町屋原 土師器

1. 赤星ノートの内容

津久井町屋原遺跡とされた一連の資料が綴じられている。野比中学校の教員から赤星博士宛に手紙が出され、「津久井の道路工事をしたところから生徒が土器を拾ってきた」と記されている。昭和26年12月13日付の書簡である。

一連の資料は、近在とみられる浅間社前の石塔類にかかる記録や、道路工事で切土された法面に確認された竪穴断面の3基分の略測図、1号竪穴から採集された弥生土器片の模式図と、現地の位置を示した略測図、竪穴からやや離れた場所から出土した土師器壺の図面が2点と、そのほか、方言を記録したようなメモ書きもある。ここでは、古墳時代後期とみられる土師器壺について紹介する。

[調査（踏査）年月]

綴じられた資料の表紙には、昭和26年12月14日と記されており、手紙を受けてすぐ現地へ行かれたことが推察される。

[記載内容概略]

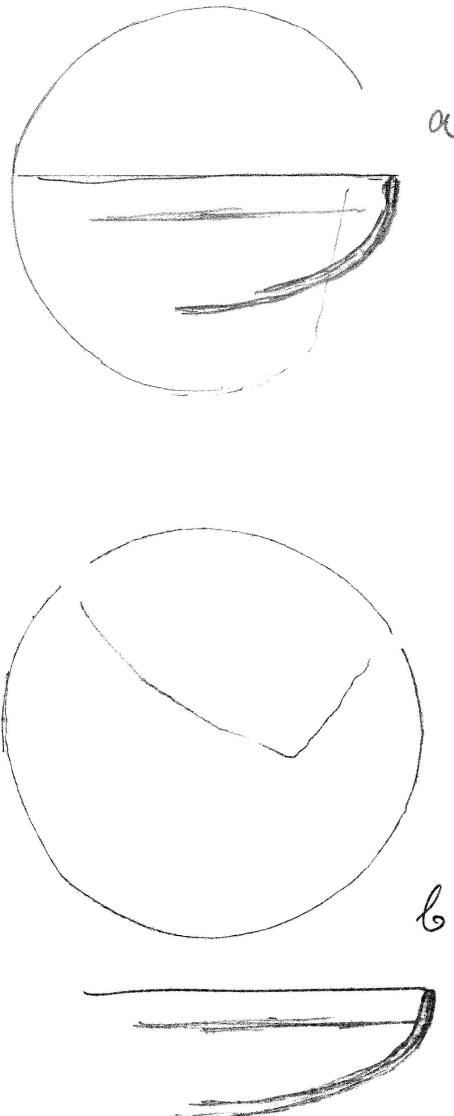
土師器壺の図には、「町屋原」「26. 12. 13」「野比中学校」というようなメモが書かれ、日付は発見日とみなされる。それぞれ法量が計測され、aとされたものが口径10.5cm、器高3.5cm、身厚1cmで、bは口径10.8cm、器高3.5cm、身厚0.8cmである。色調などの情報が書かれていないため、赤採の有無については不明である。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

簡単なスケッチのようであるが、特徴は示されている。a・b共に丸底で口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁部と体部の境で緩やかな稜ができる。bの図から完形ではないことが窺え、断面形と共に口径等のサイズが似ていることから、同一個体の可能性もある。形状からは6世紀後半から7世紀にかかる須恵器壺の蓋を模倣したような印象を受ける。それぞれの竪穴の時期は定かではないが、おそらくは集落の一端で、道路工事に破壊された遺構から出土したものと考えられる。

(柏木)



第4図 a及びbとメモ書きされた土師器壺（約1/2）

年報番号 横須賀市03142 追浜中学校附近出土土師器スケッチ 横須賀市追浜

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]

出土時期は昭和39年5月、実測日は昭和39年6月22日とメモがある。

[記載内容概略]

横須賀市博物館の封筒に入っており、「追浜 土師」とタイトルが記されている。中身は2枚あり、1枚は遺物出土位置の略地図（第5図）、もう1枚は土師器の実測図と土錐のスケッチ（第6図）である。

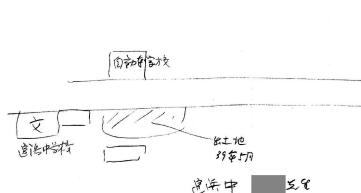
第5図には、遺物の出土位置が略地図によって示されている。「追浜中学校」（横須賀市夏島町12所在）の上には「自動車学校」とあり、これはかつてあった京急追浜自動車学校（同夏島町3所在、昭和37年開校、平成14年閉校）を指すと思われる。現在は高層マンションになっているこの自動車学校跡と追浜中学校の位置関係からみると、この略図はおよそ東南方向を上にして描かれているようである。中学校西側の敷地に「出土地 39年5月」とあり、位置関係からみて、現在の追浜中学校グラウンド西側、あるいはさらに西側の横須賀市北図書館（同夏島町12）あたりかと推測される。またその下に「追浜中 ○○先生」とメモがあり、遺物の出土を届け出てくれた人物かと思われる。

第6図は方眼紙で「追浜中学校附近」とあり、土師器の塊1点の実測図、および土錐のスケッチ4個分が描かれている。土錐は「土錐六個 淡黄土色～淡褐色」とメモがあり、実際には6個が出土したようである。これらはスケッチのため法量は確かでないが、おおよそ直径3.4～3.7cm、形状にはバラつきがあるようである。土師器塊体部は「淡黄褐色」とあり、底部付近に「黒色」とある。口径9.0cm、胴部最大径13.1cm、高さ9.9cmを測る。丸底で、口縁部下部にわずかに稜をもち垂直に立ち上がる。底部付近は黒斑がみられるようである。表面調整についての記載はない。

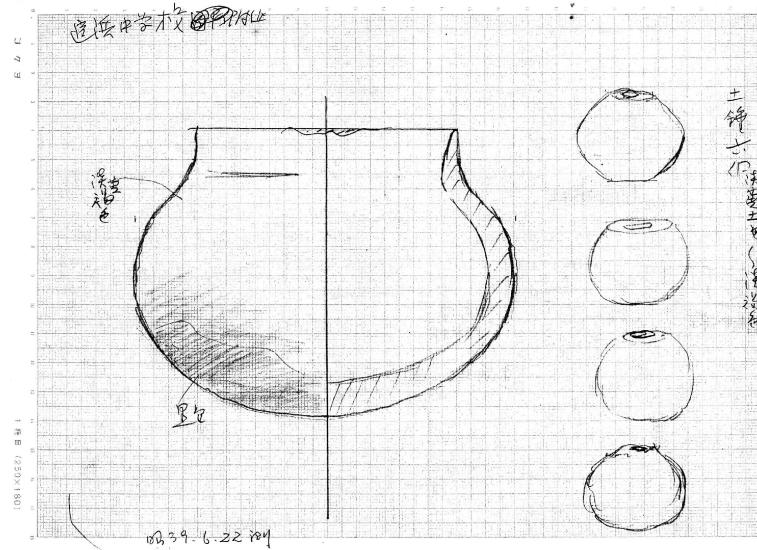
2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

土師器塊は調整の記載がないため詳細は不明だが、器形からおおよそ古墳時代後期の遺物と考えられる。



第5図 出土位置略図



第6図 土師器スケッチ

年報番号 横須賀市03148 昭和25年三浦半島古代文化展覧会写真・スケッチ・目録

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]

横須賀市市民会館で昭和25年11月16～20日に開催された、「三浦半島古代文化展覧会」を観覧した記録である。

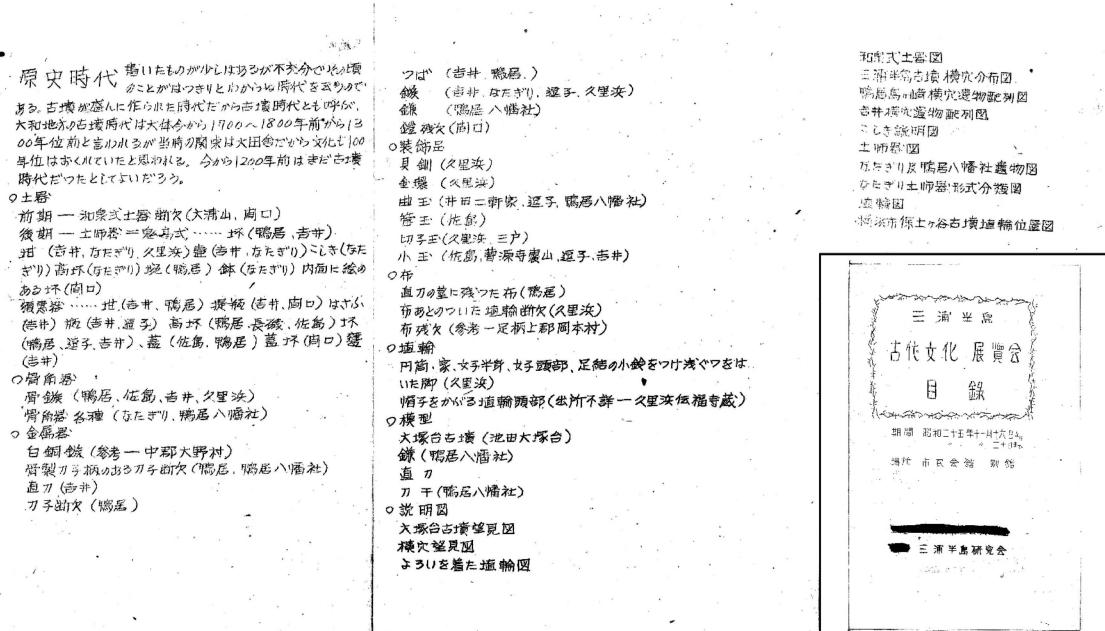
[記載内容概略]

三浦半島古代文化展覧会の目録（第7図）、観覧時の展示記録写真（第8図）、およびそのスケッチ（第9図）からなる。同展覧会は横須賀市市民会館別館にて、三浦半島研究会によって開催された。目録には各時代の解説と展示品の一覧が記載されている。先史時代（縄文時代）・弥生式文化・原史時代（古墳時代）の三部に分けて解説がされているが、ここでは古墳時代該当部分（目録原文では原史時代部分）のみを取り上げた。時代についての概説は、往時の研究史を感じさせる内容となっている。展示遺物は、三浦半島の遺跡出土品を中心に参考資料として県内他地域の遺跡出土品をいくつか混じて構成されている。第8図右下の写真にある石製模造品は目録内には見られないが、なたぎり遺跡や鳥が崎横穴出土品と書かれている。同じく第8図左下の写真には埴輪が写っており、目録には久里浜出土とある。蓼原古墳出土品と思われ、赤星自身が昭和12（1937）年に発掘をおこなった際の出土品であろう。これら埴輪の出土地点は後に改めて調査されて前方後円墳と判明し、蓼原古墳とされた。背景のパネルにある馬形埴輪は、京都大学に所蔵される同古墳出土埴輪と推測される。考察等のメモ書きは特に見られない。

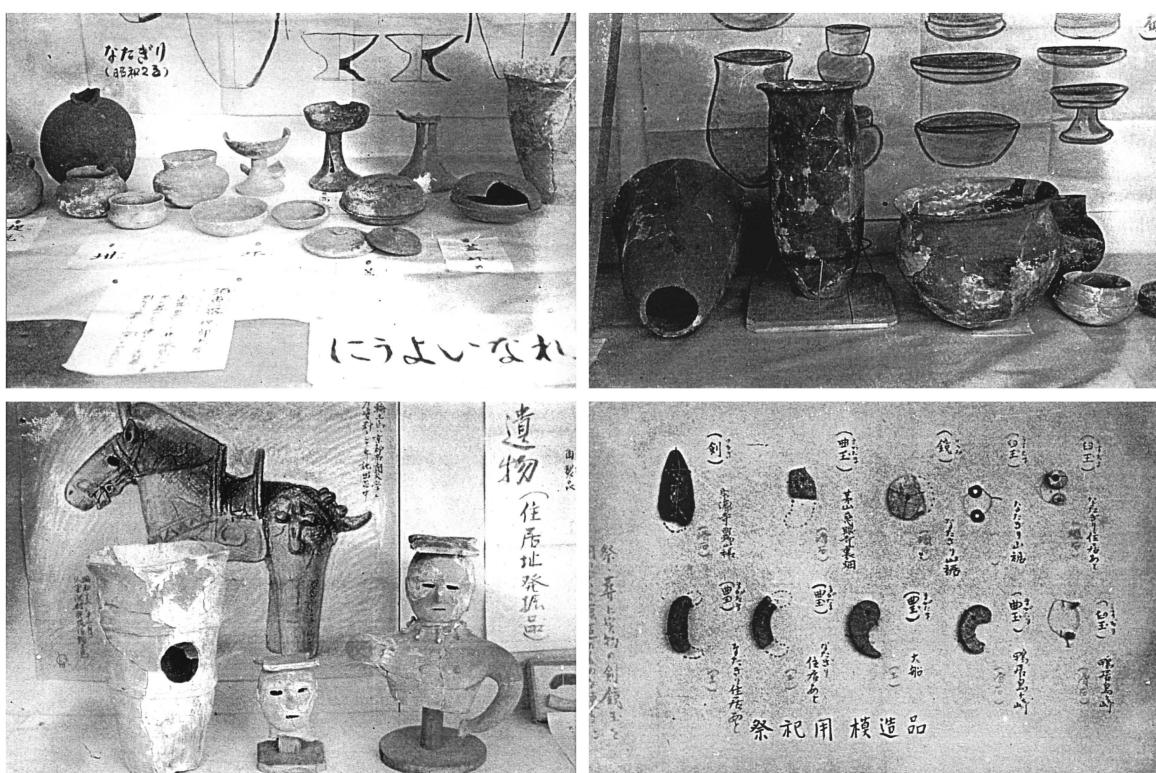
(岸本)

参考文献

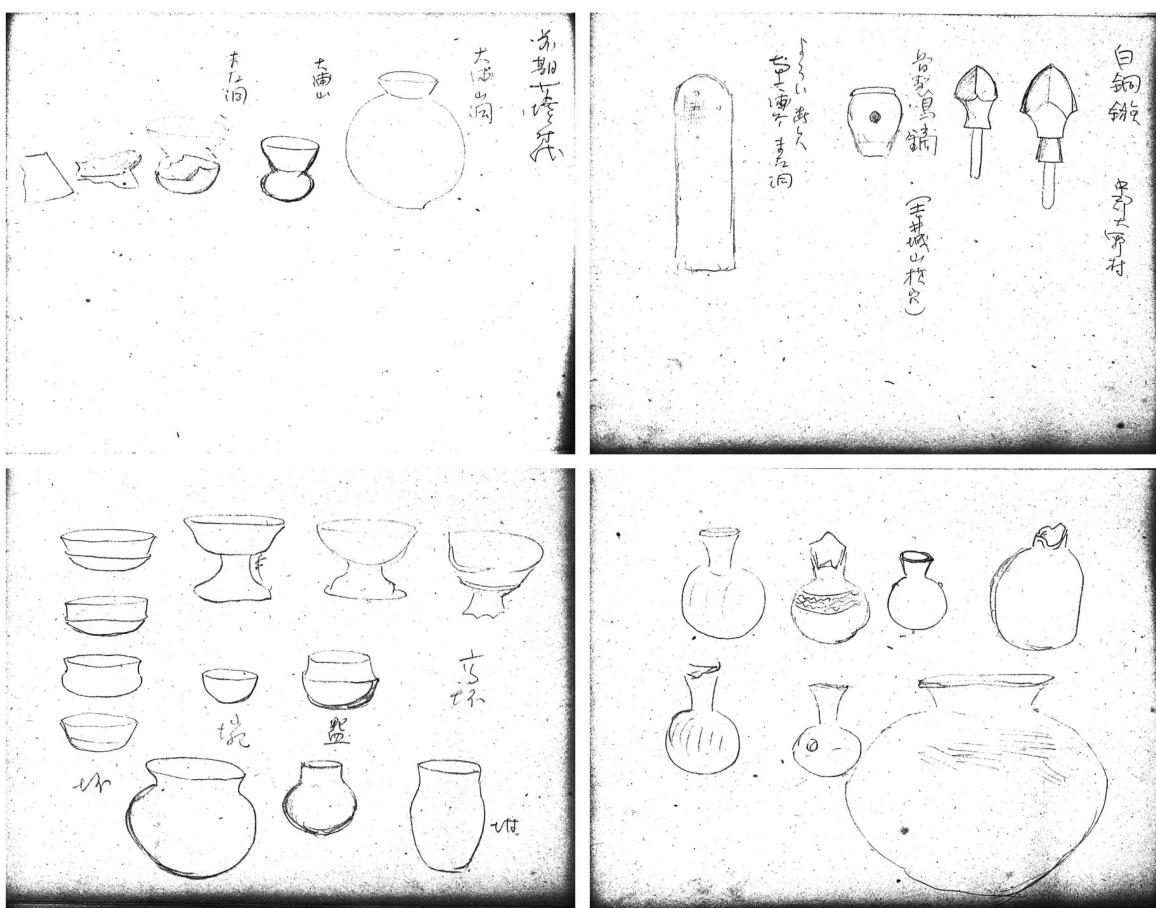
神奈川県民部県史編集室1979『神奈川県史』資料編20 考古資料、神奈川県
横須賀市編2010『新横須賀市史』別編考古



第7図 古代文化展覧会目録（原史時代部分）と表紙



第8図 展覧会展示風景写真



第9図 展示遺物スケッチ

年報番号 横須賀市03164 公郷小学校前横穴・小井土谷戸横穴・神金横穴 横穴墓スケッチ
横須賀市公郷町、三春町

1. 赤星ノートの内容

[資料概略]

広告紙2枚の裏面に描かれた横穴墓のスケッチ。3箇所の横穴墓群を記録しており、余白にはそれぞれの調査期日や出土遺物のメモ、略地図などが記されている（第10図・第11図）。

横穴1：公郷小学校前横穴 大正13年3月15日、地主が庭園を作るため山腹の笹を刈ったら発見（4穴）。昭和51年、屋敷の背後山腹を削り横穴群露出（6穴）。昭和51年12月20日～翌1月に調査。横穴墓には調査順に番号が付され、向かって左側から4・1・2・5・6・3号と記される。出土遺物のメモは1・2・5号穴のみを記載。横穴墓のスケッチは1～3号穴のみとなっており、奥壁に棺室を造り付ける3号穴については法量メモを含めて特に細かく描かれている。

横穴2：小井土谷戸横穴群 昭和4年2月11日調査（6穴）。略地図に横穴墓の番号が記載され向かって右から順に1～6と付される。出土遺物の記載はなく、横穴墓のスケッチは棺室をもつ1号のみ。「昭和23年2月1日、確認、6穴存。昭和26年11月11日、確認に行ったら左の2穴（No.5、6）見当たらず」とある。

横穴3：神金横穴 昭和3年12月28日調査（赤星、太刀川、島崎、渋谷）。4穴が略地図に記され、向かって左から1～4号の番号が付される。スケッチは1号穴のみで、遺物出土位置の略図が記されており、切子玉・琥珀玉・金属環・直刀片・鍔片・刀子片とともに火葬骨が出土している。

2. 掲載資料の整理

[遺跡概要]

公郷小学校前横穴は滝ヶ崎横穴群とみなされ、公郷町4丁目に所在し公郷小学校北側の平作川を望む南斜面に開口する。3号穴は玄室アーチ型で前壁が鈍角となる右片袖羽子板形を呈し、奥壁に接して一段高い位置に造り付け石棺をもつ。石棺前端とほぼ同位置の天井面には4個の小円孔が配される。1号穴は玄室アーチ型で前壁のない無花果形、2号穴は玄室アーチ型で前壁鈍角の羽子板形、4号穴は玄室奥半のみ残存（半筒型か）、5号穴は玄室ドーム型で円形に近い隅丸胴張り方形、6号穴は玄室ドーム型で前壁鈍角の羽子板形を呈する。出土遺物などから7世紀代を通して構築されたと考えられている。小井土谷戸横穴墓群は公郷町5丁目に所在。神金横穴墓群の南方約400mに位置し、谷奥付近の丘陵東側崖面に現在5穴が確認されている。神金横穴墓群は三春町6丁目に所在。山崎小学校の南西、公郷隧道が貫く丘陵の南端斜面に4穴が開口する。本資料の1号穴を除く2～4号穴は未調査である。

[掲載図書]

赤星直忠 1927 「三浦記（三）」『考古學雑誌』第17巻第10号 日本考古学会（滝ヶ崎横穴墓群）

赤星直忠 1957 「横須賀の発展」『横須賀市史』横須賀市史編纂委員会（小井土谷戸横穴墓群）

赤星直忠 1954 「横穴壁刻顔面画の解釈」『日本考古学協会 第13回総会発表要旨』日本考古学協会（神金横穴墓群）

[小結]

近在する三箇所の横穴墓群における棺室構造（滝ヶ崎横穴墓群3号穴・小井土谷戸横穴墓群1号穴）や火葬骨の検出（神金横穴墓群1号穴）といった特異な例を資料化したものと考えられ、ノートの作成期日は明

らかでないが調査年月にひらきのあるこれらの横穴墓群を、昭和51～52年の滝ヶ崎横穴墓群調査後にまとめたものと推察される。棺室構造の例としては滝ヶ崎横穴墓群の北東約1kmに位置する佐野横穴墓群3号穴があり、赤星氏が「三浦記（一）」のなかで棺座を伴う4・5号穴とともに紹介し当時から注視していたことがわかる。棺室構造の横穴墓は、逗子市の小坪横穴群や沼間横穴墓群などにも見受けられるが鎌倉市・藤沢市が分布の中心となっており、三浦半島内においては極めて類例が少ない。本資料にとりあげられた公郷町付近は、三浦半島内に限ればこうした特異な構造をもつ横穴墓が局所的に集中する地域と言えよう。

(長澤)

引用・参考文献

赤星直忠 1927 「三浦記（一）」『考古學雑誌』第17巻第4号 日本考古学会

横須賀市 2010 『新横須賀市史 別編 考古』

横須賀考古学会 2003 『三浦半島考古学辞典』

